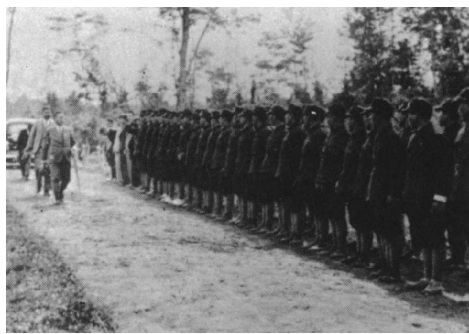




拓殖実習場①

道庁へ陳情を行い誘致に成功



道庁長官を迎えて

昭和6年(1931)道拓殖部は、本道未開地開発促進のために不屈の開拓魂と優秀な経営技術を身につけた開拓者の育成、訓練の目的で、全道の5か所を選んで拓殖実習場を設置する計画を立て、同7年十勝国大樹に十勝実習場を設置しました。翌年は網走支庁管内に北見拓殖実習場を設置する予定のあることを聞いた早乙女村長は、村議会議員とともに道庁や支庁へ陳情を行い、ついに誘致に成功しました。道内5か所の拓殖実習場は大樹村に置戸同様の定員100名の十勝実習場、同10年弟子屈に定員60名の釧路拓殖実習場、同12年豊富に定員50名の天塩拓殖実習場、同17年中標津に定員50名の中標津拓殖実習場がそれぞれ開設されています。

これより先、昭和3年から村政を執った森垣村長は拓殖山集落に近接し、釧北鉄道信号所附近一帯の官公有林内に農耕適地が数千町歩あることから、この解放運動を行っていました。余談にはありませんが、森垣村長は相次ぐ冷害凶作で危機に陥ち入っていた村の財政を建て直し、在任中2万円余の財源を蓄積した人で、同5年1月小清水村長に転出後、これを引き継いだ後任村長らが同6、7年にかけて、狭くて老朽化した置戸、上置戸、境川、秋田、川南の5校を大改築するとともに、

役場庁舎改築の基金を積みました。

さて、北見拓殖実習場は、同8年1,219町2反8畝と土地も決まり、初代場長に富田正保を迎えて、道内外から50人の実習生が募集されました。建物は北欧風の豪壮雄大な丸太組み建設で、ここにおいて勤労と修養の共同生活が始められました。傾斜地に加えて美林が多く、実習生たちは伐採、開墾を繰りひろげては、麦、えん豆、ハッカなどの特産物を育てる一方、豚、牛、鶏、めん羊の大小家畜を飼い、当時では珍しかったバターの生産もしていました。

また、置戸では唯一の貨物自動車も所有していて、いま流に言えば農業の近代化を誇っていたため、見学、視察者も結構多く、道庁長官も訪れたこともありました。

(参照『置戸町史上巻』※文中人名敬称略)



実習生と荷物を運ぶ実習場のトラック

児童がデザインした給食車走る



開町100周年こども実行委員会のメンバーが描いたデザインをラッピングした町学校給食センターの給食運搬車が冬期休業明けから町内を走っています。

車両のコンテナの左側には「はやく給食をたべたいな」と給食を待つおけばんばくん。右側には給食を食べるおけばんばくん。その周りにはスポーツや、読書、温泉に入るおけばんばくんがデザインされ、見る人の目を楽しませてくれます。